

第60回大会を終えて

2016年10月1日(土)・2日(日)と横浜国立大学にて開催された教育史学会第60回大会が無事終了しました。前日の理事会の際の夏のような蒸し暑さとは打って変わって、初日はどんよりとした曇り空の下、時折小雨が降り出すなど、会員の皆様の出足が心配になりましたが、首都圏の大会校としては例年並みの参加者324人にご参加いただきましたので、安堵したところです。一週間の間に5学会が開催されるという学会シーズンのただ中で会場の調整なども必要でしたが、最近はこの時期に入試やオープンキャンパスが重なることも多く、参加がかなわなかった会員もいらっしやったのは残念でした。

大会の華というべき分科会での研究発表は、教育人間科学部7号館で行われました。エントリーが61本でしたが、1本が発表に至りませんでした。プログラム編成の当初には、日本・東洋・西洋の枠組みを越えた試みも考えないわけではありませんでしたが、実際の配置を進めて行くとなかなか難しく、いつものスタイルに落ち着くことになりました。問題は分科会での司会者の依頼でした。司会は一人でも可能ではないかとの意見も準備委員会内ではありましたが、各分科会に2名のスタッフを配置することが難しく、こちらも例年のごとく二人ずつで司会をご担当いただくことになりました。28名の司会者を確保するのは結構大変かなと思いましたが、連絡がつくと概ねご快諾の会員が多く、さほどの困難は覚えませんでした。このあたりは、さすが教育史学会です。

シンポジウムは、3回目の国際シンポジウムとなりましたが、学会発足60周年という節目であり、また、学問的な教育史研究への出発から100年という二重の意味での記念とするべき年でもありましたので、教育史学会創設の原点への視線を向けながら、今後の教育史研究が進むべき方向性について議論するという、本学会にとっての根本的なかつ大きな問題を課題とすることにいたしました。しかもそこに海外からの視線を盛り込みながら、複眼的なアプローチを展開し、かつてある研究者が「アキレスのかかと」と指摘したように、やや一方向に傾斜する気味のある教育史学会のあり方を解きほぐしていくことができるという意図がありました。国際シンポジウムといいますと、同時通訳や会員による通訳を介するディスカッションということになり勝ちであり、言葉の壁からくるもどかしさが否めないものですが、今回は登壇していただいた海外からの視点の提案者・指定討論者のいずれの方も日本語が堪能であり、こうした問題はほぼ乗り越えることができたといえましょう。大学と共催でしたので一般に公開されたこともあり、370名収容可能な教育文化ホール大集會

室が7割近く埋まり、まずまずの盛況でしたが、ステージの下手近くに配置されていたフルサイズのグランドピアノにお気付きでしたでしょうか。100年近く前のベヒシュタインの年代物ですが、前身校の一つである高等工業の校長の方針の下で学生向けに導入されたものであり、今でもホールでのコンサートなどで立派に鳴り響きます。高等教育機関における大正新教育の象徴ですが、その傍らで同時期の先駆者による学問としての教育史研究の飛躍に思いを馳せながら、教育史研究の行方についてユーモアと緊張感が交錯するなかで充実したディスカッションができたと思っております。

コロキウムは4企画でした、参加者数は把握致しませんが、それぞれの会場が熱い雰囲気であったことはたしかのようです。100名以上の出席者がみられた会場では、議論が尽きることなく、海外からの出席者も感心されていました。

分科会やシンポジウムの合間、附属図書館で開催された貴重書庫所蔵コレクションの展示「伝統社会の教育から近代教育への変容」にも200名近くの会員にお越しいただきました。「謙堂文庫コレクション」と「府川コレクション」から厳選した資料を通して中世・近世から近代へと展開していく教育の歩みを俯瞰していただけましたでしょうか。「広瀬淡窓書」が放つ迫力や『小学読本』の多様な存在の確認など、展示物の数々から予想外の強い感銘を受けたとの感想もお聞きし、資料展示を行った甲斐がありました。

懇親会には127名にご出席いただきました。なかなか予約が増えず気を揉みましたが、準備委員会横尾事務局長の話芸もあって、どうにか基本ラインを越えました。大吟醸「横浜国大」(山形産ですが)、神奈川の地酒、スコッチ、ボルドーワインなどを多めにご用意いたしました、いかがでしたでしょうか。

同時間帯に他学会の懇親会も別会場で開かれていましたので、散会後の送迎バスを2台手配し宿泊ホテル近辺までお送りしましたが、これはご好評でした。

横浜駅からの足場が今一つですが、緑濃き丘を楽しんでいただくのも一興と割り切り、第60回大会をお引き受けいたしました。8名の準備委員会委員に24名の大学院生を中心とする学生スタッフの熱意に支えられて、運営が滞り無く進行了しました。また、多数の会員の皆様にご参加いただき無事に終えることができたことに心からの感謝を申し上げます。

第60回大会準備委員会 委員長
大戸 安弘 (横浜国立大学)

総 会 報 告

2016年10月1日(土)午後1時10分より、横浜国立大学教育文化ホール1階大集会室にて、教育史学会第60回大会総会が開催された。まず新谷恭明代表理事より、続いて第60回大会準備委員会を代表して大戸安弘準備委員長より挨拶があった。

議長団として須田将司会員・横尾恒隆会員が選出され、議事が進行された。審議事項は全案件が原案通り承認された。総会出席人数は139名。

【報告事項】

1. 第59回大会年度会務報告

八鍬事務局長より、以下の会務報告がなされた。

(1) 第59回大会年度中の会員異動

(2015. 9. 1～2016. 8. 31)

年度当初会員数862名 入会数21名 退会者数39名 年度末会員数844名

(2) 第59回大会の開催

2015年9月26日・27日に、宮城教育大学で開催された。参加者数は207名であった。

(3) 『会報』の発行

2015年11月25日、および2016年5月25日に「会報」を発行した。

(4) 役員（理事・監査）選挙の実施

教育史学会役員（理事・監査）選挙を2016年6月17日公示、7月15日を投票締め切りとして実施し、7月16日に開票を行った。結果については「報告事項2」にゆずる。

(5) 代表理事および機関誌編集委員選挙の実施

代表理事および機関誌編集委員選挙を2016年8月1日公示、8月18日を投票締め切りとして実施し、8月19日に開票を行った。結果については「報告事項2」にゆずる。

(6) 『日本の教育史学』のJ-STAGE 登載

『日本の教育史学』第58集をJ-STAGEに登載し、2016年5月2日より公開を開始した。

第1集～第57集までのバックナンバーについても、CiNiiからJ-STAGEへのデータ移行を申請し、8月に移行が完了している。今後の公開方針につ

いては「報告事項6」にゆずる。

(7) 『日本の教育史学』第59集の発行

2016年10月1日付で発行。発行部数1,150部。

(8) 国際化促進

海外主要国のナショナルライブラリーに「日本の教育史学」第58集を寄贈した。

2016年3月に国際教育史学会(ISCHE: International Standing Conference for the History of Education)に年会費を納入し、正式な機関会員となった。

2016年8月にシカゴで開催されたISCHE大会に、宮本健市郎理事に出席いただいた。

(9) 他学会との共同

2016年3月19日に開催された、教育関連学会連絡協議会主催・公開シンポジウム「人文社会科学の危機と教育学部の将来」について、会員に周知を図った。

(10) メールマガジンの創設

会員向けのメールマガジン「教育史学会メールニュース」を創設し、2015年12月18日より送信開始した。今年度は、有効なメールアドレスを登録している会員621名に対し、計7回発行した。

(11) 理事会の開催

第1回 2016年3月26日 立教大学池袋キャンパス
報告事項 会務報告／第59回大会決算報告／第60回大会の準備状況について／紀要第59集編集経過およびJ-STAGE 登載準備状況について／紀要第59集書評の編集経過について／60周年記念事業について／国際交流について／5学会共同シンポジウム「教育改革と学問の自由」について／その他
審議事項 書評委員の選出について／機関誌印刷所の見直しについて／60周年記念事業について／国際交流委員会からの提案事項／選挙（理事選挙・代表理事選挙・編集委員選挙）について／入退会者の承認について／次回理事会について／61回大会開催校について／収支の将来見通しについて

第2回 2016年9月30日 横浜国立大学

報告事項 第60回大会の準備状況について／会務報告／各種選挙結果について／『日本の教育史学』第59集編集委員会報告／第6回教育史学会研究奨励賞選考結果について／『日本の教育史学』書評委員会報告／編集幹事の委嘱について／国際交流委員会報告／60周年記念誌編集委員会報告／その他

審議事項 第59回大会年度決算および監査報告について／第60回大会年度事業計画と予算（案）について／機関誌印刷所の選定について／J-STAGEへのバックナンバー登載について／編集委員会規程の改正について／書評委員会規程の改正について／国際交流委員会からの提案事項／大会校のローテーションについて／入会・退会者の承認／総会の運営について／第6回研究奨励賞授与式の実施について／その他

2. 理事・監査選挙結果について

選挙管理委員が校務により総会欠席のため、八銚事務局長が代わって選挙結果報告を行った。

教育史学会役員（理事・監査）選挙を2016年6月17日公示、7月15日を投票締切として実施し、7月16日に開票を行った。投票者数134名（投票率16.4%）。その後、理事互選による代表理事選挙を実施した。結果は以下の通り（敬称略）。

■代表理事 米田俊彦

■新理事一覧

荒井 明夫	(日)	大東文化大学
一見真理子	(東)	国立教育政策研究所
大戸 安弘	(日)	横浜国立大学
小野 雅章	(日)	日本大学
柏木 敦	(日)	大阪市立大学
川村 肇	(日)	独協大学
木村 元	(日)	一橋大学
木村 政伸	(日)	九州大学
小玉 亮子	(西)	お茶の水女子大学

駒込 武	(一)	京都大学
坂本 紀子	(日)	北海道教育大学函館校
清水 康幸	(日)	青山学院女子短期大学
新保 敦子	(東)	早稲田大学
鈴木 理恵	(日)	広島大学
高橋 陽一	(日)	武蔵野美術大学
野々村淑子	(西)	九州大学
橋本 美保	(一)	東京学芸大学
広田 照幸	(一)	日本大学
船寄 俊雄	(日)	神戸大学
前田 一男	(日)	立教大学
宮本健市郎	(西)	関西学院大学
八銚 友広	(日)	東北大学
山名 淳	(西)	京都大学
湯川嘉津美	(日)	上智大学
吉川 卓治	(日)	名古屋大学
米田 俊彦	(日)	お茶の水女子大学

■監査

大島 宏	(日)	東海大学
山田 恵吾	(日)	埼玉大学

3. 機関誌編集委員会選挙結果について

引き続き八銚事務局長が選挙結果について報告した。

機関誌編集委員選挙を2016年8月1日公示、8月18日を投票締切として実施し、8月19日に開票を行った。投票者数は22名（投票率84.6%）。以下の会員が、第60・61集の編集を担当する委員として選出された。

■第60・61集機関誌編集委員

荒井 明夫	(日)	大東文化大学
大矢 一人	(日)	藤女子大学
小野 雅章	(日)	日本大学
吉川 卓治	(日)	名古屋大学
大塚 豊	(東)	福山大学
古川 宣子	(東)	大東文化大学
三時眞貴子	(西)	広島大学
白水 浩信	(西)	北海道大学
駒込 武	(一)	京都大学
樋浦 郷子	(一)	国立歴史民俗博物館

なお、第59・60集を担当する委員は以下のとおり。

■第59・60集機関誌編集委員

井上恵美子	(日)	フェリス学院大学
木村 元	(日)	一橋大学
坂本 紀子	(日)	北海道教育大学函館校
湯川嘉津美	(日)	上智大学
一見真理子	(東)	国立教育政策研究所
佐藤 由美	(東)	埼玉工業大学
宮本健士郎	(西)	関西学院大学
山名 淳	(西)	京都大学
今井 康雄	(一)	日本女子大学
大桃 敏行	(一)	東京大学

また、第59回大会年度第1回理事会において理事の互選の結果、第60集書評委員が以下のように決定したことが報告された。

■第60集書評委員

沖田 行司	(日)	同志社大学
小野 雅章	(日)	日本大学
鈴木 理恵	(日)	広島大学
古川 宣子	(東)	大東文化大学
小玉 亮子	(西)	お茶の水女子大学
白水 浩信	(西)	北海道大学
駒込 武	(一)	京都大学

4. 『日本の教育史学』第59集の刊行について

川村編集委員長より、「日本の教育史学」第59集が、2016年10月1日付全119ページで発行されたことが報告された。論文掲載数は9本（内訳は日本6、東洋1、西洋1、複合領域1）。シンポジウム等第59回大会記録、書評・図書紹介それぞれ10本を掲載した。

5. 教育史学会創立60周年記念事業について

米田60周年記念誌編集委員長より、以下の報告があった。

昨年の総会で記念誌編集委員会の発足後、1年間準備を進めてきた。2000年以降の教育史の各領域の研究動向をまとめた記念誌にするという方針で編集委員を募り、現在各領域ごとに取り上げる内容を取りまとめているところである。「前近代日本教育史、

日本の近現代学校教育、戦後日本教育史、東アジア植民地教育史研究、ヨーロッパ教育史、欧米の新教育、ジェンダーと教育、高等教育史研究の現状と展望、教員史・教員養成史、ナショナリズムと教育」の10章構成を予定している。

基本的には図書の紹介になるが、すべてを網羅するわけではなく、過去と比較して新しい傾向が見えるか、また、最近の研究の中で対立点が発生しているものがあるか、など、現在の研究動向が分かるような内容にしていく予定で、2年後には出版できるよう準備中である。

6. J-STAGE への機関誌掲載方針について

八鍬事務局長より、以下の報告があった。

「日本の教育史学」第58集をJ-STAGEに登載・公開済みであるが、登載内容は「研究論文・シンポジウム報告・書評・図書紹介」である。また、CiNiiで公開中の「日本の教育史学」全バックナンバーについてはJ-STAGEにデータ移行が完了しており、データ確認の上で公開作業を行うこととなっている。

昨年J-STAGE側で掲載方針の変更があり、査読付き論文以外の資料等も広範に登載対象となったことから、理事会で検討した結果、①機関誌掲載の全コンテンツをJ-STAGE登載公開対象とする（広告は登載対象外）、②その際、「査読付き」として取り扱う範囲は「研究論文」のみとする、③CiNiiからの移行データについては川村理事を担当理事として来年4月1日をめどに公開できるよう作業を行う、の3点を決定した。

【審議事項】

1. 第59回大会年度決算について

八鍬事務局長より第59回大会年度決算報告および貸借対照表に基づき説明があった。

今年度より新たな費目として「国際学会関連費」が支出されているが、これは国際教育史学会に正式に機関加盟したことによる年会費および納入にかかった費用である。

当年度収支差額の赤字額がやや大きくなっているが、これは例年報告のとおり、過去に累積した余剰金を消費するために計画的に執行しているものである。

2. 第59回大会年度会計監査結果について

柏木敦監査・高橋陽一監査より、9月10日に東北大学事務局に出向いて会計監査を行った結果、収支決算および資産管理が適切になされていることを確認した旨報告があった。

決算および監査報告について一括審議の結果、異議なく承認された。

3. 第60回大会年度予算について

八鍬事務局長より、資料に基づき予算案について説明があった。

事務局経費に、資料保管費として12万円を新規に計上した。これまで、3年毎に事務局が変わるたびに大量の学会資料・雑誌バックナンバー等に移転していたが、都内にトランクルームを借りることにより安定的な保管場所を確保し、良好な保管状態を維持したい、という趣旨である。

予算案について審議の結果、異議なく承認された。

4. 編集委員会規程の改正について

八鍬事務局長より、近年とみに日本分野の投稿論文が増えていることにより第一段階審査において日本分野担当の編集委員の負担が過重になっているため、編集委員選挙において、全体の定数は変えず日本領域の編集委員を1名増、一般領域の編集委員を1名減とする規程改正を行いたい旨、提案があった。

審議の結果、異議なく承認された。

5. 書評委員会規程の改正について

八鍬事務局長より、現行の書評委員会規程を維持すると、機関誌編集委員会の副委員長の人選がきわめて限られてしまうという傾向が顕著になってきたため、書評委員は「機関誌編集委員会の正副委員長を兼ねない」との規程を「機関誌編集委員会の委員長を兼ねない」に改正したい、との提案があった。

審議の結果、異議なく承認された。

6. 国際交流委員会規程の制定について

八鍬事務局長より、資料に基づき「国際交流委員会規程」の新設について提案があった。

国際交流関係についてはかねてより理事会で当理事を置き、活発に活動してきたところであるが、このさい規程を設け、規程に基づく委員会として活動を継続していきたいとの趣旨である。

審議の結果、異議なく了承された。

7. 第61回大会について

八鍬事務局長より、次回第61回大会を岡山大学で開催したい旨提案がなされ、異議なく了承された。

以上をもって議事はすべて終了した。

審議事項7を受けて、次期大会開催校である岡山大学・尾上雅信会員よりメッセージ（八鍬事務局長代読）をいただいた。

最後に今大会年度で退任する新谷恭明代表理事、また新たに代表理事に就任する米田俊彦理事よりそれぞれご挨拶をいただき、第60回大会総会を閉会した。

【第6回教育史学会研究奨励賞授与式】

総会に先立ち、第6回教育史学会研究奨励賞授与式が執り行われた。

受賞者と受賞論文は以下のとおり（敬称略）。

山本 和行

『芝山巖の「神社」化—台湾教育会による整備事業を中心に—』

受賞者の山本和行会員には、新谷代表理事より表彰状ならびに副賞5万円が授与され、受賞者のスピーチが行われた。



第 59 回大会年度決算報告

収支計算書 (2015. 9. 1～2016. 8. 31)

収入

単位：円

費目		予算	決算	差異	備考
会費	59回年度個人会費	3,740,000	3,636,000	-104,000	5,000*723人 3,000*7人 納入率84.9%
	過年度個人会費	500,000	426,000	-74,000	56回年度*3人 57回年度*18人 58回年度*65人
	小計	4,240,000	4,062,000	-178,000	
機関誌等 販売収入	機関誌販売収入	264,600	309,582	44,982	@2,646*117冊
	50周年記念誌販売収入	2,500	3,750	1,250	@250*15冊
	小計	267,100	313,332	46,232	
雑収入	受取利息	1,000	683	-317	
	その他雑収入	0	0	0	
	小計	1,000	683	-317	
当年度収入合計	A	4,508,100	4,376,015	-132,085	
前年度繰越金	B	9,023,896	9,023,896	0	
収入総計	C = A + B	13,531,996	13,399,911	-132,085	

支出

単位：円

費目		予算	決算	差異	備考
大会費	大会運営費	1,150,000	1,150,000	0	第59回大会 (宮城教育大学)
編集費	機関誌刊行費	699,840	699,840	0	第58集印刷費 (1,160部) 648,000+消費税
	編集複写費	10,000	22,250	-12,250	
	編集交通費	500,000	340,010	159,990	
	編集会合費	40,000	38,913	1,087	
	編集通信費	40,000	41,172	-1,172	
	編集消耗品費	10,000	12,685	-2,685	
	編集謝金	80,000	72,000	8,000	英文校閲 @8,000
	編集人件費	200,000	200,000	0	
	編集雑費	5,000	0	5,000	
	書評等原稿謝金	15,000	15,000	0	非会員謝礼 @5,000
	書評用図書購入費	70,000	70,000	0	書評委員 @10,000
	振込手数料	1,500	1,296	204	
	電子ジャーナル公開関連費	100,000	96,984	3,016	J-STAGE 登載委託費
小計	1,771,340	1,610,150	161,190		
事務局経費	人件費	860,000	873,200	-13,200	嘱託給与840,000 学生アルバイト33,200
	旅費交通費	500,000	368,904	131,096	理事会旅費274,634 会計監査65,690 他
	会合費	10,000	13,624	-3,624	理事会茶菓代他
	奨励賞関係費	60,000	53,751	6,249	奨励賞副賞50000*1 賞状・式次第印刷費他
	通信運搬費	550,000	543,947	6,053	会報発送費146,776 選挙関連発送費118,438 他
	消耗品費	50,000	44,892	5,108	事務用品、プリンタインク他
	印刷製本費	350,000	339,558	10,442	会報印刷費178,202 選挙関連103,182 他
	手数料	60,000	54,849	5,151	振替手数料、送金手数料他
	H P管理運営費	80,000	45,204	34,796	レンタルサーバー代、メールマガジン料金
	名簿刊行費	0	0	0	
	小計	2,520,000	2,337,929	182,071	
国際化促進関係費	旅費交通費	200,000	60,150	139,850	国際交流委員会旅費
	謝金	50,000	0	50,000	
	国際学会関連費*	30,000	15,999	14,001	国際教育史学会年会費 (100ユーロ) 他
	印刷費	10,000	0	10,000	
	通信運搬費	20,000	6,870	13,130	機関誌海外発送費
	会合費	10,000	0	10,000	
	消耗品費	10,000	0	10,000	
小計	330,000	83,019	246,981		
60周年記念事業費	準備費	100,000	228,256	-128,256	60周年記念誌編集委員会旅費・資料購入費
雑支出	雑支出	10,000	3,693	6,307	弔電
予備費	予備費	50,000	15,000	35,000	5学会シンポジウム負担金
当年度支出合計	D	5,931,340	5,428,047	503,293	
当年度収支差額	A - D	-1,423,240	-1,052,032	-371,208	
次年度繰越金	E = C - D	7,600,656	7,971,864	-371,208	
支出総計	D + E	13,531,996	13,399,911	132,085	

貸借対照表 (2016.08.31現在)

資産

単位：円

費目		金額	備考
現金	現金	0	
預金	郵便振替口座	1,418,202	
	ゆうちょ銀行	293,402	
	ゆうちょ銀行定額貯金	5,000,000	
	みずほ銀行	4,395,533	
	小計	11,107,137	
前払・仮払	大会仮払金	1,150,000	第60回大会 (横浜国立大学)
	60周年記念事業仮払金	800,000	国際シンポジウム (横浜国立大学)
立替・未収金		0	
資産総計	F	13,057,137	

負債・積立金および繰越金

単位：円

費目		金額	備考
前受金	60回年度会費	80,000	5000*16人
	61回年度会費	5,000	5000*1人
	小計	85,000	
未払金		273	弔電消費税分未払
積立金	将来計画積立金	5,000,000	ゆうちょ銀行定額貯金
負債・積立金合計	G	5,085,273	
第60回大会年度への繰越金	H = F - G	7,971,864	
負債・積立金・繰越金総計	G + H	13,057,137	

会計監査報告

第59回大会年度会計につき監査を実施し、収支決算および資産管理が適切になされていることを確認しました。

2016年9月10日

監査 柏木 敦 ㊞

監査 高橋 陽一 ㊞

第 60 回大会 年度予算

収入

単位：円

費目		予算	58回決算	備考
会費	60回年度個人会費	3,610,000	3,636,000	5000*850名*85%
	過年度個人会費	400,000	426,000	
	小計	4,010,000	4,062,000	
機関誌等 販売収入	機関誌販売収入	264,600	309,582	3,780円*0.7*100冊 250*10冊
	50周年記念誌販売収入	2,500	3,750	
	小計	267,100	313,332	
雑収入	受取利息	500	683	
	その他雑収入	0	0	
	小計	500	683	
当年度収入合計 A		4,277,600	4,376,015	
前年度繰越金 B		7,971,864	9,023,896	
収入総計 C=A+B		12,249,464	13,399,911	

支出

単位：円

費目		予算	58回決算	備考
大会費	大会運営費	1,150,000	1,150,000	第60回大会 (横浜国立大学)
編集費	機関誌刊行費	777,600	699,840	第59集印刷費 (1,150部) 720,000+消費税 59集J-STAGE登載、バックナンバー公開作業費 英文校閲 @8,000 編集幹事謝金 非会員謝礼 @5,000 書評委員 @10,000
	電子ジャーナル公開関連費	200,000	96,984	
	編集複写費	20,000	22,250	
	編集交通費	500,000	340,010	
	編集会合費	40,000	38,913	
	編集通信費	40,000	41,172	
	編集消耗品費	10,000	12,685	
	編集謝金	80,000	72,000	
	編集人件費	200,000	200,000	
	編集雑費	5,000	0	
	書評等原稿謝金	15,000	15,000	
	書評用図書購入費	70,000	70,000	
	振込手数料	1,500	1,296	
	小計	1,959,100	1,610,150	
事務局経費	人件費	890,000	873,200	嘱託70,000*12ヶ月 アルバイト50,000 理事会交通費400,000 他 会議茶菓代 奨励賞副賞50,000*1 賞状・式次第印刷費 会報発送費、機関誌発送費 事務用品、宛名ラベル、プリンタインク等 会報印刷費170,000 学会封筒印刷費等 振込手数料学会負担分他 レンタルサーバー代他 10,000*12ヶ月
	旅費交通費	500,000	368,904	
	会合費	10,000	13,624	
	奨励賞関係費	55,000	53,751	
	通信運搬費	500,000	543,947	
	消耗品費	50,000	44,892	
	印刷製本費	250,000	339,558	
	手数料	60,000	54,849	
	HP管理運営費	80,000	45,204	
	資料保管費	120,000	0	
	小計	2,515,000	2,337,929	
国際化促進関係費	旅費交通費	200,000	60,150	国際交流委員会旅費 英文校閲等 国際教育史学会年会費 (100ユーロ) 他 第60回大会国際シンポジウム開催費用 海外主要ナショナルライブラリーへの 機関誌送付費
	謝金	50,000	0	
	国際学会関連費	20,000	15,999	
	国際シンポジウム開催費	800,000	0	
	印刷費	10,000	0	
	通信運搬費	20,000	6,870	
	会合費	10,000	0	
	消耗品費	10,000	0	
小計	1,120,000	83,019		
60周年記念事業費	準備費	300,000	228,256	60周年記念誌編集委員会旅費他
雑支出	雑支出	10,000	3,693	
予備費	予備費	100,000	15,000	事務局移転費用
当年度支出合計 D		7,154,100	5,428,047	
当年度収支差額 A-D		-2,876,500	-1,052,032	
次年度繰越金 E=C-D		5,095,364	7,971,864	
支出総計 D+E		12,249,464	13,399,911	

機関誌編集委員会規程新旧対照表

改 正	現 行
<p>第5条 委員の選挙においては、各理事は、次の4つの区分ごとに、その定数に応じた人数の会員を委員候補として投票する。</p> <p>①日本教育史を専攻領域とする会員 5名 ②東洋教育史を専攻領域とする会員 2名 ③西洋教育史を専攻領域とする会員 2名 ④教育史一般を専攻領域とする会員、複数の専攻領域を届け出ている会員または専攻領域を届け出していない会員 1名</p> <p><u>付 則 (2016年10月1日改正)</u> この改正規程は、第60回大会年度において実施される編集委員の選挙より施行する。</p>	<p>第5条 委員の選挙においては、各理事は、次の4つの区分ごとに、その定数に応じた人数の会員を委員候補として投票する。</p> <p>①日本教育史を専攻領域とする会員 4名 ②東洋教育史を専攻領域とする会員 2名 ③西洋教育史を専攻領域とする会員 2名 ④教育史一般を専攻領域とする会員、複数の専攻領域を届け出ている会員または専攻領域を届け出していない会員 2名</p>

書評委員会規程新旧対照表

改 正	現 行
<p>第5条 委員は、機関誌編集委員会の委員長を兼ねないものとする。</p> <p><u>附 則 (2016年10月1日改正)</u> 1 この改正規程は、第60回大会年度より施行する。</p>	<p>第5条 委員は、機関誌編集委員会の<u>正副</u>委員長を兼ねないものとする。</p>

国際交流委員会規程

第1条 教育史学会（以下「本学会」という。）の国際交流活動を推進するため、理事会に国際交流委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

第2条 本委員会は、次の委員をもって構成する。

- 一 理事会の互選によって選出された理事 若干名
- 二 理事会の議に基づき代表理事が委嘱する理事以外の会員 若干名

第3条 委員の任期は、前条第1号の委員については、選出されてから理事の任期が終了するまでの最長3年間とし、第2号の委員については、委嘱されてから第1号の委員の任期が終了する時までとする。

第4条 本委員会に委員長を置く。

2 委員長は、第2条第1号の委員の互選によって選出する。

第5条 本委員会は、会則第2条に定める本学会の目的達成のため、下記の事項について協議し、理事会に提案する。

- 一 国際交流の諸活動
- 二 会則第13条で定める海外特別会員との連携協力など、海外特別会員に関する本学会の方針

付 則 この規程は、第60回大会年度より施行する。

「外地」中等教員ネットワークの形成過程—広島高等師範学校を中心に—を終えて

山本 一生 (上田女子短期大学)

本コロキウムは2014年度科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究「帝国日本の「外地」中等教員ネットワーク」課題番号26590199、研究代表者・山本一生)による研究成果を報告する目的で山本一生(上田女子短期大学)をオルガナイザーおよび司会とし、山本による趣旨説明ののちに以下の6つの報告が行われた。①「広島高等師範学校卒業生の「外地」転出動向」(山本一生)②「戦前中等教員の需要と供給—「内地」と「外地」との関係をどのように読み解くか—」(杉森知也:日本大学、紙面報告)③「広島高等師範学校卒業生の外地教員への異動実態—内地から外地への移動の社会背景の考察—」(角能:東京大学)④「「外地」中等教員ネットワークと広島高等師範学校—朝鮮における師範教育界の事例に着目して—」(山下達也:明治大学)⑤「幣原坦の「外地論」」(松岡昌和:秀明大学・非)⑥「広島高等師範と新教育運動」榎木瑞生(同朋大学名誉教授)である。以下、各報告の概略をまとめる。

一、山本報告 尚志会員の勤務先動向を『広島高等師範学校一覧』を用いて量的に検討し、「外地」に赴任した広島高等師範学校出身者は1920年代初めに朝鮮へ、1930年代半ばより満鉄附属地・満洲国へ向かう傾向があったことを指摘した。

二、杉森報告 1940年代に入るまで「外地」では中等教員養成機関が設立されなかったため、原則として「内地」からの「派遣教育職員」制度を通して現職教員が「外地」に派遣されて補充する方針が採られた。しかし「内地」で就職難があると、初任者が「外地」教員となるケースが増加することを指摘した。

三、角報告 杉森報告を受け、「内地」の就職難と初任者の「外地」就職との関係を分析した。「外地」に転出する広島高等師範学校を卒業した教員は、1910年代から1920年代にかけては在職年数が多いベテラン教員だったが、1920年代以降は初職で「外地」に転出する教員の割合が増加した。それは「内地」において師範学校への赴任が減少したこととパラレルの関係にあった。

四、山下報告 植民地朝鮮を事例に、師範学校ができる以前の1910年代に広島高師を卒業してすでに経歴を積んだベテラン教員が朝鮮に転出し、1920年代以降に朝鮮で広島高師卒業生の就職が量的に拡大する基礎固めを行ったのではないかという仮説を提示した。さらにこの仮説を検証するために京城師範学校初代校長の赤木萬次郎を事例とし、尚志会員による学閥形成過程の具体相を検討した。

五、松岡報告 第二代広島高等師範学校校長であつ

た幣原坦が著した1912年と1941年の著作を検討対象とし、前者では欧米列強寄りの立場から植民地教育を紹介したが、後者ではむしろ欧米列強と日本とは異なる立場を明確にしており、これらの著作は時局に対応する「官僚の作文」だったのではないかという仮説を提示した。

六、榎木報告 広島高等師範学校卒業生が「外地」に広めた「新教育運動」は、軍や宗教団体と密接な関係を持ちながら展開した。その「新教育運動」は欧米の「進歩的教育思想」ではなく、「自分で考える」ことを重視した、近世より続く教育思想を基盤としていた。

以上の報告に対して、フロアから以下の発言があった。複線化を前提とした戦前の学校体系において、「よい教師」とは一体どのような教師だったのか。教育技術を備えた教員ならば、文検(文部省検定)を経た教員の方がよほど適切だったはずだが、なぜ教員組織を広島高等師範学校出身者で固める必要があったのか。広島高等師範学校側から捉えるだけでなく、「外地」という地域や日本人社会での保護者が広島高等師範学校出身者に期待した役割に注目する必要があるのではないか。このご指摘を踏まえ、養成校側だけでなく、地域側から分析する視点を採り入れて、今後の研究を進展させていきたい。

最後に、企画者側の報告が長くなってしまったために参加者からのご意見をいただく時間が十分に確保できなかった点を反省いたします。また、2時間半という長時間にわたってご参加いただいた会員の皆様に感謝申し上げます。

「幼児教育における〈遊び〉と〈学び〉—プロジェクト活動の史的展開を手がかりに—」

太田 素子 (和光大学)

コロキウムは、「幼児教育における〈遊び〉と〈学び〉—プロジェクト活動の史的展開を手がかりに—」というテーマで開催された。幼児教育史、かつ現代史という教育史学会においてはマイナーなテーマで、聞いてくださる方がいるだろうかと心配したが、40部準備したレジュメは全てなくなり、参加された方からわざわざ「一言の感謝」のハガキまで頂けてホッと安堵している。

プロジェクト活動といえば、キルパトリックのプロジェクト・メソッドに由来する実践は日本にも長い伝統がある。及川平治や倉橋惣三の出発点もそこにあつたし、戦後三層構造論を導入した久保田浩の保育課程論もその延長上にある。それら幼児期のプロジェクト活動は、数人から数十人の子どもたちが、共通の関心事にもとづいて自発的に活動を進め、作り上げた作品や充実した一連の遊びの過程を通じて自分たちの活動に達成感を持ち、心身ともに力をつ

けてゆくことをめざす教育方法と理解されてきた。しかし、1960年代に北イタリアのレッジョ・エミリア市で生まれ、1980-90年代に英国、北欧、米国に広がりつつあるプロジェクト・アプローチは、「エマーゼント・カリキュラム」いうのに近い、物や事柄との関わりの中で生じた子ども達の疑問や興味を、変幻自在に探求する指導計画を立案する。

今回のコロキウムで浜田真一は、レッジョ・エミリア・アプローチの核となる概念、「progettazione (プロジェクト)」および、主要なツールとしてのドキュメンテーションとアトリエリスタについて、実践を例示しながら紹介した。また太田は、国家レベルでレッジョ・エミリア・アプローチの受容を試みたスウェーデンについて、伝統的な「テーマ活動」とプロジェクトを比較しながら、後者のナショナルカリキュラムへの影響を検討した。

そして、第2次大戦後の日本の保育実践を検討した浅井幸子は、(1)「活動主義」から「知性主義」へ、(2)受動的な子ども観（無力なものとしての子ども）から能動的な子ども観（有能な子ども）へという座標軸を設定し、四象限のなかに多様なプロジェクト型の保育を位置付けて分析する仮設的な枠組みを提起した。久保田浩、小松福三、安部富士男らの保育実践がこの分析枠組みから検討された。討論の中では、アイザック研究家の榊瑞希子から、イギリスの場合の60年代の保育研究の展開が、また古澤常雄からはルソー、フレネを引用してプロジェクト・アプローチへのコメントが、里見実からはマラグッツイの実践と思想について解説が加えられた。ヨーロッパ全体としてどのような研究動向が進んでいるのか、これまで大きな見取り図の中で60年代以降の新教育の展開を確認する機会に筆者は恵まれなかった。今回、実践そのものに集中し、そこからムーブメントの全貌に近づく歴史研究の可能性に少し手応えを感じることができたと考えている。

コロキウム「日本教育史研究の系譜—佐藤秀夫の研究論考・教育史史料研究・教育史史料公開」の主題究明は途上にある

逸見 勝亮（北海道大学名誉教授）

◇参加者は90人ほどだった。参加者・報告者の「感想」を摘記して報告に替える。

◇佐藤のいう「公務としての研究」とは、ほかならぬアーキビストとしての歴史研究のことだろう。いま学校所蔵資料が、公文書管理法の網をすり抜けて次々と廃棄されているという。この現状をどう変えていくのか、それこそ「公務としての研究」の重要な課題となっている。

◇ふたつの論文は、ざっくり読んで参加しました。人物像がわかるような、エピソード、回想を傾聴しました。消去法で、自分の強みを挙げていく、そういうエピソードは、とても人間的で、手書きもいいます。差別的な状況に置かれた人々、弱者へのまなざし、と人物を知る研究者から聞いておりました。

若手の研究者に、惜しみなく資料を送ってください、非常に温かい方だった、とうかがっています。お会いしてみたかったです。

◇司会者、報告者、フロアの発言を聞き逃すまいと、学問を志した当初のように、耳をそばだててメモを取りました。事前に必読文献二編を読み直し、祝日大祭日儀式形成過程に関する論考は、私が教育史の授業で学校儀式について講義している内容の根本をなすものだったことに気づきました。

小野報告にあった佐藤先生にとって、教育制度・政策史と、「モノ」「コト」の歴史とが「表裏一体」であったという点は、私が研究で目指していることと同じです。

◇小川報告は、佐藤先生の史料研究と公開、そして、研究の視野について、的確にまとめられていた。小川さんは抑制的にアイヌ教育史に焦点を絞っていたが、佐藤先生の研究への目配り、そしてその前提となる史料収集のことなど改めて感じた。長期的な展望の中で史料を博捜することの意味、そのなかから公共性をどうとらえながら研究を進めるのか、とかく忘れがちなものを改めて認識した。

◇小野報告は、丁寧で、良かったと思います。もっとじっくり喋ってもらえばよかったです。僕の報告は「1」で書いたアイヌ教育史研究と「2」で書いた佐藤秀夫さんと資料公開・資料研究の話とは、僕自身の中では密接に繋がっているのですが、その繋がっているさまをうまく示せなかったため、いきおい「2」が浮いたと反省しています。

「研究の系譜」が主題のはずなのに、どうしても逸話や思い出が増えるのが残念でした。逸見さんが再三、「佐藤秀夫の、モノや慣行、学校文化に関する秀逸な仕事も、制度史からきているのだ」と述べていたことが、参加者にどれくらい伝わったのか。教育史学会（学界）の方法意識にも関わる問題ですので、佐藤さんが、「社会史」流行に対して制度史から豊かな事実史に挑む自身の回路を対置させていたことを強く示すべきでした。

“アーキビストとしての佐藤秀夫”に関わる議論では、依然として“地域資料を自分たち（＝研究者）が使えるか否か”に関心が傾注しがち（“「使える」ために保存される、かどうか”も同断）であることへの違和感、あるいは強い留保も提示しておきたかったと反省しています。学校文書をはじめとする地域資料は、研究者のためのものでも、博物館や文書館のためにあるものでもなく、まずもってその資料に記録された児童・生徒や地域の人々のためにあるべきもの。他者がこれらの記録資料を“使う”ためには、先ず“資料の当事者”にとっての意味が問われるはず（直接・間接の説明責任、と言い換えてもよい。なおこれは、「地元研究者との協働」とは意味が異なる）。佐藤秀夫が地域教育史研究に関わって自問し学界に問うたのは、こういうことでもあったはずでした。

◇私の感慨は、報告者の「感想」と重なるが、敢えて記せば「本コロキウムの主題究明は途上にある」

である。報告を担った小野・小川両氏に感謝申し上げる。

近代日本における教育情報回路と教育統制（5） —地方教育会の屋台骨・校長会の活動実態の分析— 梶山 雅史（岐阜女子大学）

本コロキウムは、2005年第49回大会以来「教育情報回路としての教育会の総合的研究」をテーマとして企画し、第12回目となる。今回は、各地方教育会組織の中核・実質的担い手として機能していた校長会の活動実態に照明を当てた。「教育会は何であったのか」の問いを深めていく上で不可欠の研究課題である。まず群馬県と岐阜県の事例研究に取り組んだ。

一、清水禎文報告「昭和期における小学校校長会の組織と機能～群馬県を事例として～」

戦前全国小学校長会副会長を務めた田部井鹿蔵が長年会長を務め、強力なリーダーシップを発揮した群馬県群馬郡にスポットをあて、教育会の中核を担った校長会の活動実態がいかなるものであったか、その詳細を明らかにした。

群馬県では昭和5（1930）年から6年にかけて教員給遅配、不払い、強制寄付問題から小学校校長会が組織され、教員待遇改善を要求する運動を展開し、小学校教員を巻き込みその結果として各郡市に小学校教員会が創設された。昭和8（1933）年長野県における二・四事件に象徴される教員赤化事件以降、同年11月に開催された群馬郡小学校教員大会は、小学校教員会の方向転換を図り、日本精神の宣揚、国体観念の明徹、思想善導に向かって舵を切る。教育会は天皇主義・軍国主義・帝国主義的傾向を強め、国民精神作興運動、満蒙開拓青少年義勇軍の送出へと向かう。この過程は当局による権力的な統制ではなく、むしろ教育会側の自発的な恭順の過程であった。国策を積極的に担い取っていく意志決定は小学校校長会であり、リーダー的な小学校長達の判断であったことを考察した。群馬県における教育会の満蒙開拓青少年義勇軍送出の経緯・具体的取り組み、小学校長たちの満蒙視察・視察報告の配布資料から重い歴史の襞が垣間見えてくる。

二、梶山雅史報告「岐阜県恵那郡教育会における恵那郡校長会の活動実態 戦中―戦後」

大正15（1926）年郡制廃止時に、敢えて私設校長会を結成した岐阜県恵那郡における教育会と小学校長会にスポットを当て、戦中から戦後への大きな舞台の転換そこでの役割・活動実態の解明を試みた。恵那郡小学校長会は日常的に頻繁に寄り合い、春秋の節目に開催される教育会総会前日には、恵那郡校長会総会を設定していた。種々の教育問題・課題、処理案件を討議し、実施事項が整えられ、翌日の教育会総会が着実に推進されていた。まさに校長会が教育会の骨組みを造りさらにその内実を形成していた様相が見てとれる。

戦争の拡大につれ、各省庁、諸団体から戦時総動

員の具体的課題が相次いで校長会・校長会長宛に到来する。満蒙開拓青少年義勇隊募集、国民精神文化研究会、思想対策研究会、師魂錬成会、東亜教育研究会等々、校長はそれらの地方理事、指導者となり、戦時国策の担い手となっていった。戦意昂扬対策、食糧増産激励、軍需品生産慰問激励、義勇軍訓練、疎開学童協力等、全面的に戦時翼賛を実践した。

昭和20（1945）年8月15日敗戦の詔書、戦前教育の崩壊、虚脱の日々を経て、戦後教育再建に向かう注目すべき動きが現れた。昭和21年春、県内各郡市小学校長会長会議で、小学校長伊藤恭一（岐阜県教育会長）を衆議院議員候補者とし、教権独立・国会に教育者の代表を送るため「岐阜県教職員連盟」が結成され、全面的な選挙活動を展開し県下最高得票当選となった。昭和22年5月には新たに 岐阜県六三校長会、恵那郡六三校長会（会長西尾彦朗）が発足した。同年6月、岐阜県教育会は改組し、「民主教育の振興普及に寄与し以て平和国家の建設と地方文化の発展に貢献すること」を目的に掲げた。改組後の会長は伊藤恭一（衆議院議員）、県教育会役員構成は校長会と教職員組合関係者が同数であった。教育会と教職員組合は両立・連携の動きをとる。校長会は極めてアクティブにリーダー役を果たした。同年12月には岐教組が中心になり、校長会、PTA、婦人会、青年団、町村長等に呼びかけ、岐阜県教育復興会議が開催され、続いて各郡市にも教育復興会議が開催された。9月、恵那郡六三校長会は、教育委員会委員選挙に西尾彦朗（恵那郡国民学校長会長）を推薦し、西尾彦朗は岐阜県教育委員さらに委員長となった。岐阜県教育復興会議が立ち上がっていく状況を迎え、昭和23年12月岐阜県教育会は解散するに至る。恵那郡では昭和24年2月、恵那郡内の諸団体の総力を挙げて「恵那郡教育復興会議」を開き、恵那郡教育をどう振興するかを討議。「恵那郡教育振興会」が結成され、恵那郡教育会はそこに包摂されて発展的解消となる。あらたに恵那郡教育研究所（所長西尾彦朗）が設立され、振興会の運営する機関と位置づけられ、各町村負担で60万円の研究所運営予算が決定されるに至った。以上の経緯を限られた時間で足早に紹介したのであるが、戦中から戦後への恵那郡教育会と校長会の軌跡は、1940年代教育史研究に新たな難問を投げかけてくる。小学校長会及び小学校長とりわけ校長会長たちの思想と行動について、緻密な本格的分析が必要である。

今回、二県の分析であったが、校長会の出来方、活動内容に随分相違がみてとれる。教育会の骨組み形成、「屋台骨」としての性格・特質の違い、特に戦前・戦中・戦後の各時代における校長会の果たした機能の違いを、共同研究として詳細に比較検討する事が共通課題として確認された。各府県さらに各郡市分析をすすめる際に、特に敗戦後の教育会の解散、新教育への転換をめぐる、教員組合と校長会の関係に緻密な考察が必要となる。

大会参加記

大会参加記

稲井 智義（北海道教育大学）

八鍬友広事務局長の粋な計らいによって、参加記を書く機会を得た。

初日の研究発表で必ず聴きたかったのは、森田尚人会員のものである。発表後に聞いたところによれば、「研究発表デビュー」であるという。門外漢の筆者が刺激を受けたことは、ヒストリオグラフィーの重要性である。ソヴィエト教育視察団の歴史的意味を、参加者の社会活動と思想遍歴を描き出すことによって示す今回の報告はまさに、森田氏が二年前のシンポジウムで提起したヒストリオグラフィーの取り組みであった。山名淳会員からの質問に回答する中で、その取り組みが教育思想史研究に他ならないことも強調されていた。これまでの歴史叙述の前提にある歴史観を批判的に検討し、既存の歴史観の中に自らの研究を意味づけることが、容易でなくとも必要であることを痛感した時間であった。

国際シンポジウムも、今回聴きたかったものの一つである。指定討論者の VAN STEENPAAL Niels 会員は、タイトルにある「船出」を受けて「大航海時代」というたとえを用いた韓龍震氏に対して、むしろ教育史研究は「開港」して、新たな目的地をいかに設定するかが求められるというコメントを加えた。タイトルや比喻を読み替えるという文化史的なセンスが光るそのコメントから、二年前のシンポジウムで登壇された山名会員が提案された「通史の設計図のコンペのようなもの」（小国喜弘司会のまとめ）との共通点を感じられた。複数想定される教育史研究の「目的地」や「設計図」に対して、私自身がどう向き合い、新たなものを示しうるかは、今後も考え続けたい。

この問いを考えるためには、大会でも発表者・発言者が随所で意識していた、現実的な問題に対する応答についても問う必要があろう。羽田貴史会員はシンポジウムで質問する中で、教育や学校が変化していく21世紀において格差は正と公教育の関係を問うていた。第7分科会の各発表者からも現実に対する課題意識が、筆者には感じられた。あるいは、時間の都合で帰らざるを得なかったコロキウムで取り上げられた佐藤秀夫氏が「教育と政治」というテーマを問い続けたことも、改めて考える機会を持ちたい。

限られた時間と体力で発表や質疑応答、コメント

を聴き、謙堂文庫コレクション・府川コレクションを観る中で、教育や教育史学会の背後には、複数の時間軸と社会・文化が流れていることを再認識した。貴重な二日間を作り上げることに尽力された皆さまに感謝したい。

第60回大会参加記

国谷 直己（東洋大学・大学院）

私は教育史学会に初参加なので、教育史界の総本山に行くといった気持ちで期待に胸を膨らませていた。私は目下、昭和戦前期の茨城県下における国体論の強調と水戸学と教育との接点を研究対象に据えており、1日目は第3分科会から離れることはなかった。

私は、藤田会員の問題意識の一つである、「国体」や「皇道」、「日本精神」などという言葉を用いても、言説の担い手によって実に多様なあり方を示してそれらが包容される形で雑居して」いるといった考えに、ハッと気づかされた。水戸学は、それぞれの学者に共通した思想はあるものの、大小差異が雑居している。水戸学が学風と評価される由縁である。藤田会員の発表と同時期にあたる茨城県教育界では、1939（昭和14）年に制定された茨城県教育綱領において、「神州」と「皇国」の表現が併存している（元々の水戸学では日本を「皇国」と呼ばない）。当時の水戸学者、水戸学に依拠した教育者たちの用語を整理して、時勢を考慮しながらそれぞれのイデオロギーを精確に解釈しなければならない重要性について、マスター時代の指導教員から教わったことを思い出し、再認識することができた。藤田会員の問題提起に感謝する。

浅学の私にはコメントできる力量もないかと思うが、以下、簡単な感想を列挙しておきたい。林会員の発表は、国語教育における自然愛が日本精神と結ばれる過程を丁寧な分析したもので興味深い。鈴木会員の発表は、毛筆芸術主義による習字が国語科から独立した教科になったが、芸術性と精神性を強調したがゆえに、時勢の影響を受けた手本の言語によって軍国主義的教育の一端を担ったことを明らかにしたもので勉強になった。

2日目の午前中は第8分科会に参加した。前田会員と越川会員の共同発表では、先行研究に対する論旨の意義付けの鋭さと徹底した原資料分析の重要性

について学ばされた。新資料を活用して体制対運動の二項対立的枠組みを超えるとは、まさに私の問題意識でもある。白岩会員の発表も興味深かった。フロアから、軍機の数や予科練生在学時の階級、海軍史でどのように扱われているかなどといった議論が展開された。今後の研究成果に期待している。須田会員の発表からは、少年団における活動の目的や内容が、たった数年の間に急速に変化したという印象を受けた。戦時下教育が進む過程における証左の一つだと思った。

また、私はコロキウム3に参加した。佐藤秀夫氏について小野会員と小川会員より異なった角度からの発表があった。佐藤氏について理解が深まったと思う。その後は、逸見会員の名司会によって楽しい討論が繰り広げられた。あまりに可笑しくて、何回も笑ったことを鮮明に記憶している。

大会参加記を書くのはこれで2度目(全国地方教育史学会で1回)だが、執筆しているときに発表や討論を振り返ることができて、私自身の学習が深まり、また研究意欲も掻き立てられる。執筆の依頼をくださった新谷恭明会員に感謝申し上げる。最後に、乱文のほどお詫び申し上げるとともに、些細な質問や会場案内などにも、とても丁寧で迅速に対応していただいた大会実行委員会の皆様と学生スタッフに感謝申し上げて筆をおく。

大会参加記

徳山 倫子(京都大学・大学院生)

今年の教育史学会に参加した所感を、1日目の午後(総会とシンポジウム)を中心に綴りたい。私は総会には途中から参加したが、会場に入ったまさにそのときに、新谷恭明前代表理事の退任挨拶が終わろうとしていた。「親愛なる新谷先生の挨拶を聞き逃すとは! 今回の学会参加における最大の不覚……」と後悔するなか、米田俊彦新代表理事の就任挨拶が始まった。就任挨拶のなかで特に印象に残ったのは、現在の教育史学会には800人以上の会員がいるが、かつては1000人に迫る人数を誇っており、会員数の減少が懸念されているという話であった。私は教育学部出身ではなく他分野に在籍しており、歴史系の学会にいくつか所属しているが、それらの学会はもっと小規模である。教育史学会には、必ずしも歴史を専門としていない教育学の研究者や現場の教職員が多く所属しているため、規模が大きいのだろうと想像した。

次いで、シンポジウムが始まった。テーマは「教

育史研究の新たな船出——教育史研究はどこに向かうべきか——」。私がこのシンポジウムに参加して感じたことは、教育史が抱えている問題はふたつの視点から分解できるのではないかというということであった。ひとつめは、歴史学の一分野としての問題である。近年、歴史系の諸学会においては、自らの学会がどのような方向に向かうべきかといった、「手詰まり感」を隠しきれないようなテーマで大会や学会誌の特集を組むという現象がしばしば見られるように感じる。そして、その打開策として、比較的研究が進んでいない戦後領域の開拓が課題として提案されているように思われる。米田代表理事の挨拶においても、戦後の研究が進んでいないことが課題であると述べられていたが、これは教育史だけが抱える問題ではないのであろう。

ふたつめは、教育学のなかの一分野としての問題である。歴史学の研究者は過去を客観的に記述することが求められるが、教育史の研究者の多くは教育学の研究者でもあり、「教育とはいかにあるべきか」という問いに答えたいという欲望と客観的な叙述の相克に悩み続けるという「宿命」を背負っているように思われる。主観的な記述を避け事実を忠実に記すことにより、大胆に記述をすることが躊躇された結果、「教育史は些末的だ」と自嘲する傾向が生じているように感じるのである。

ところで、私が教育史において魅力を感じていることのひとつとして、実証水準の高さが挙げられる。教育関係の史料は学校・役所・資料館などに比較的多く残されており、多すぎる史料群をいかに分析するかと悩むケースも少なくない。史料が豊富ということは歴史研究をするにあたって大いなる魅力である。「些末」とは換言すれば「精緻」とも言えるはずである。細やかで精密なものは人の心を惹き付ける。教育史のもつ「精緻」さは、この分野ならではの可能性を秘めているのではないかと思う。

第60回大会参加記

原 圭寛(弘前学院大学)

初めて筆者が大会に参加したのは京都大学での第55回大会で、翌年には初めて個人発表をする機会を得た。以降本学会の先生方には、発表のたびに手厚いご指導を賜った。今大会では残念ながら発表はできなかったが、このような機会を設けていただいたため、この場をお借りして改めて感謝を申し上げたい。

60回大会で特に印象に残っているのは、以下の2

つの個人発表であった派。1つ「デューイ・ソヴィエト教育視察団とそのメンバーたち」（森田尚人会員）で、特にここで採用されている方法論に興味こそされた。あるテーマに対して基にすべき資料が質・量ともに十分に存在しない場合にそのテーマをどのように扱うか、という問題に対し、森田会員は従来とは「まったく逆の方法論的視点」、すなわち「参加者一人ひとりのそれまでの社会活動や思想遍歴をたどることを通して、この視察団の歴史的意味の、ある一面を明らかに」することを提唱した。この「各領域のヒストリオグラフィーの動向のなかに一人ひとりのしごとを位置づける」という手法は、従来資料的な制約のため議論の俎上に上がってこなかった歴史上の様々な場面を描出する契機になり得よう。

もう1つは、「小川芳男著『英語教育法』（1963年）の英語教育史における意義」（惟任泰裕会員）で、特に高等教育論に興味がある筆者にとって、「アカデミズムによる教育の蔑視」に関する議論は興味深かった。以下は発表の趣旨とはややずれた卑見を述べることとなるが、しかしこの議論で気になったのが、教育蔑視の一例として福原麟太郎の言説を取り上げている点である。福原は確かに教授法を「末葉の問題」と断じてはいるが、これをすなわち「教育の蔑視」と解釈しても良いのだろうか。ここで福原は、もしかしたら教授法に代わる教育の理念を有していたのではないか。だとしたら、福原は教育を蔑視していたのではなく、ここは異なる2つの教育観の対立として描出されるはずである。このような見方ができれば、この発表は近代的な「教育」を相対化するような思想を描き出せるのではなからうか。こうした観点から筆者はこの発表に対して可能性を感じ、また大変に勉強になった。

最後に、今回の大会にあたり、お世話になった事務局及び会場校の先生方に心より感謝申し上げたい。受付から懇親会後のバスの手配まで、気配りの行き届いた大会運営で不自由なく参加することができた。大変に充実した2日間であった。

第60回大会に参加して

藤田 悠以（大阪市立大学・院生）

大阪市立大学大学院文学研究科教育学専修前期博士課程1年生の藤田と申します。現在は、日本の教育政策において、家庭で教育することが当然と見なされるようになった背景を研究したいと考えています。政策や社会情勢の流れの中にどのような思想が

あるのかを研究するために、教育史の研究手法や研究姿勢を学びたいと考え、大会に参加しました。

今までは一人で一泊するような遠出をしたことがなく、大阪から横浜へはあまりにも遠かったのが、当初は参加をあきらめようと思っていましたが、夏ごろに同級生が参加すると聞き、えいやっと私も参加することにしました。そこからはあつという間で、宿や新幹線の予約をしているうちに当日になりました。

三ツ沢上町駅に着くと、出口で同じようなスーツを着た人と目が合いました。もしかして、教育史学会に参加する人かなと思ったものの、お互いに声をかけることはできず、大学前の木の階段のところでやっと挨拶しました。それから二人で何とか会場にたどり着きました。

会場への到着が少し遅れてしまったので入室できるか不安だったのですが、発表と発表との間にすつと入ることができました。発表の仕方やレジュメの使い方、記述の仕方など、発表する人によって様々で、とても勉強になりました。特に、資料をどのようにして入手したのかについてしっかり記録しておかなくてはいけないということは、肝に銘じます。言葉の使い方や選び方についても、今回いただいたレジュメを参考に勉強します。

シンポジウムでは、「教育史研究の新たな船出——教育史研究はどこへ向かうべきか——」というテーマで討論が行われましたが、大きな学会に参加したのは初めてでしたので、質問した方とシンポジストの方とのやり取りが行われるまでは、とても厳かな雰囲気緊張しました。「船出」という言葉そのものにこだわって考えてみるという議論もあり、自身が研究する際にも一つひとつの言葉にこだわりたいと思います。

二日目の研究発表でも部屋を回り、色々な発表を聞くことができました。これだけたくさんの方の研究発表を拝聴できる機会はなかなかありません。

普段、論文や著書を拝読して、憧れている先生もいらっちゃって、とても感激しました。運が良ければお話もできるということですから、こんなに素敵な場はないなと思います。

学会中はたくさんの先生とお話しさせていただき、自身の研究についてのアドバイスもいただきました。研究テーマのあやふやさも痛感しましたので、自分の言葉で明確に説明できるようにもっと丁寧に、そしてまた、来年も参加できるように、研究を進めていきたいと思っています。

このたびお世話になりました皆様に心よりお礼申

上げます。ありがとうございました。

大会参加記

溝田 直己（日田市教育庁咸宜園教育研究センター）

私は北部九州のほぼ中央・大分県の西部に位置する日田市の咸宜園教育研究センターに勤めております。咸宜園は皆様ご存知のとおり、幕府直轄地であった日田・豆田町の豪商廣瀬家の長男 廣瀬淡窓が1817年に開いた近世日本最大規模の私塾です。元々、日本中世史を専攻し、中近世移行期の在地領主層を研究対象としていたため、近世史や教育史学については全くの門外漢であります。そのため、咸宜園の調査研究に携わるようになりましてから、教育史学会に入会し、日々勉強させていただいております。

さて今回、初めて大会参加させていただき、1日目・2日目の分科会とシンポジウムに出席いたしました。

分科会では特に第6分科会の小宮山道夫氏の「東北地方の中等教育再編と第二高等学校との接続に関する研究」と湯川嘉津美氏の「学制期の府県教育会議に関する研究」を興味深く拝聴させていただきました。

小宮山氏の報告は、第二高等学校進学者の進級の過程と本籍地の分析から東北地方と第二高等学校との接続関係について考察されたもので、東北地区に設置され、地域の拠点となるべきものが、わずか6年の間に東北地区から入れない、または入らない学校になっていったという結論は非常に興味深いものでした。また分析の対象となった第二高等学校一覧の中に日田市出身の井上順之助の名前がありました。井上が試験を受けたのが明治20年であることを考えれば、他の高等中学も設置されていた中で、なぜ進学先が二高であったのか。後の時代ですが台湾に設置された台北高等学校への入学者の中に帝国大学進学のために内地からも多くの入学者がいたことが知られるように、高等学校間における入学難易度の違いなどがあったのか素人ながら気になりました。

湯川嘉津美氏の「学制期の府県教育会議に関する研究」は、明治8年の府県学務課設置と文部省事務章程改正を前提として新たな地方学事の方法を合議する場として、教育会議が用いられていたことを指摘するものでした。以前、咸宜園出身者で明治期の県学務課に務めていた経歴のある人物の史料を整理していた際に、教育会議への出張辞令などの公文書を見たことがありますが、今回の発表で教育会議

の性格や府県規模や学区単位で開かれていたことなどがわかり、大変勉強になりました。

最後にシンポジウムについての感想を述べさせていただきます。今回のシンポジウムは「教育史研究の新たな船出——教育史研究はどこに向かうべきか——」というテーマ設定であり、私のような初学者にとっても大変有益なものでした。

シンポジウム提案者のリチャード・ルビンジャー氏、韓龍震氏、辻本雅史氏の3氏に共通していたのは、学校史や一国教育史からの克服であり、その手法はリテラシー研究であったり、エリアスタディーズ（地域研究）として、他地域（国）と比較検討（対話可能に）することであったり、デジタル・ヒューマニティーズなどであったかと思えます。

教育史学と同様に日本史学においてもこの一国史からの克服という問題については、朝尾直弘氏の「時代区分論」（岩波講座『日本通史』別巻1 歴史意識の現在 1995）においても課題として指摘されています。そこでは一国史的な歴史の把握への反省とともに「ひとつひとつの個別研究が、なんの問題意識もなく、方法についての吟味もなく、ただ機械のごとく「専門化、細分化」した「実証」によるだけでは、これを「統合」する手がかりさえつかめない」とあり、学生時代に自身の研究を省みたとき、非常に厳しい言葉であると感じたことをこのシンポジウムで思い出しました。また結びの中で朝尾氏は「世界に対し地域が自立し、それぞれの地域世界の内発的展開が主題になるとすれば、基準とする時系列もいったんは複数であってよいはずである」と述べています。

この言を借りて無責任なことをいってみれば、国民国家や発展段階論的なものにより作られた時代区分からいったん離れてみて、「日本」という地域がかつてあった、または続いている教育の姿を描きだし、教育史学者の立場からの時代区分を試みるというエリアスタディーズがあってもいいのではないかと個人的に感じた次第です。

以上、取り留めもなく大会に参加した感想を述べさせていただきましたが、各報告者や先行研究の意図を十分に汲めていないことがあれば、それはひとえに私の力量不足によることですのでご容赦ください。

大会参加記

山田 美香（名古屋市立大学）

今回は、国際シンポジウム「教育史研究の新たな

船出—教育史研究はどこに向かうべきか—」を聞く機会を得た。教育史研究の国際化に関する議論はとても興味深いものであった。海外の大学に赴任した「日本人」学者、国内の「外国人」学者、「外国人」日本研究者が、主に日本語で教育史を語ることで、参加者が、日本国内の教育史研究をどのように国際化していくのか、改めて考えるきっかけになった。しかし、あれは、国際シンポジウムなのか、という声も聞かれた。広く教育史研究の国際化を議論することができなかったからである。また、論点のはっきりしないシンポジウムでもあった。教育史の方向性を考えるうえで、論者の異なる論点が、教育史研究にとってそれぞれどんな意味があるのか、理解することは難しかった。

私は中国教育史を勉強してきたが、欧米で研究発表をするという発想を持たなかった。欧米で発表するモデルとなる教授や先輩院生が誰もいなかったことによる。まず日本の学会誌への投稿・掲載を考えるべきだというなかで育ち、海外で勉強する機会を失ったまま、年を重ねてしまった。今回、論者の話を聞くことで、グローバル社会で、教育史研究が日本国内でその意義を問われるだけでは、何の評価もなされないことを感じた。今後、若い世代が海外に情報発信をしないことは、研究能力面で問題があるとみなされるだろう。

中国教育史研究者は、その土地の言語を用いて、当地の史料を用いて、中国人研究者でも行っていない新しい研究を行っている。今回の学会では、丁寧に史料を読み、それを整理する新しい研究が多く、日本における最新の中国教育史研究を目にすることができた。

古い話をすれば、1990年代の中国では、社会主義史観による教育史研究が重視されたため、教育史の概説書以上の研究はあまりなかったと大勢が指摘されているとおりである。しかし、現在の中国では、若手研究者を中心に、史料から教育史を研究する者が大変増えた。欧米に留学した中国人研究者も多く、中国教育史は、日本人が用いる史料中心の研究とも異なる、新しい歴史観に基づく研究が多くなった。

それでは、日本における中国教育史研究は、何を目指し、どの方向に進んでいくのか。今回の国際シンポジウムでは、日本教育史研究の国際化の議論が中心であった。しかし、中国教育史など、海外教育史研究をしている者からすると、「教育史の研究史」から、現在のグローバル社会で、中国教育史研究はどの国でどのように議論されているのか、また、それはどのような歴史観によるものなのか、本当は、

そのあたりを聞きたかった。別の国では、自分の研究対象とする国の教育史をどう捉えているのか、それは単に海外の研究情報を知るだけでなく、日本における教育史研究の意義を問い直すことになるため、聞きたかったのである。

第60回大会シンポジウムに想う

——「船」のメタファーをめぐって

山名 淳（京都大学）

シンポジウム「教育史研究の新たな船出—教育史研究はどこに向かうべきか」に参加した。報告者3名からは、リテラシーの歴史研究にもとづく考察対象の拡張が（Richard Rubinger氏）、マルチメディア時代における歴史的想像力の復権が（韓龍震氏）、海外における研究・教育活動にもとづいて実感された「学際化」と「国際化」の推進が（辻本雅史氏）、それぞれに提起され、後半ではそれらの報告をめぐって質疑応答が繰り返された。

質疑応答の終盤で、指定討論者のファンステンパール氏から、そもそもシンポジウムの題目に込められたメタファーはいったい何を表そうとしているのか、という問いが発せられた。このメタファーの主たる目標領域（target domain）は、明らかに教育史研究の学問ディシプリンであり、その起点領域（source domain）は「船」である。では、「出港地」はどこなのか。「入港地」とは何なのか。船が乗り出していくはずの「大洋」は何を意味するのか。ファンステンパール氏は、このメタファーが教育史研究の変遷を把握するための像を提供することにはたして成功しているのだろうか、という根本的な疑問を呈していたのだろうか。入港地の不在。それにもかかわらずの出帆。「悲壮な覚悟」（韓氏）がタイトルに嗅ぎ取られる場合があるとすれば、思い浮かべられるのはそうしたイメージなのだろう。

横浜からの帰路、シンポジウムの内容を反芻しながら自ずと思い起こされたのは、ドイツ教育学会誌『ツァイトシュリフト・フュア・ペダゴギーク』が2010年に組んだ特集「歴史的的教育研究—イノベーションと自己省察」である。教育史研究の来し方と行く末に関するドイツ教育史家たちの見通しは驚くほど楽観的であった。「教育学という学問の拡張過程を振り返ってみると、ドイツ国内において、また国際的にも、1970年半ば以降の歴史的的教育研究ほど明白な成功の歴史を辿った分野はそれほど多くない」（Schuch, J/Tenorth, H.-E./Welter, N.: Historische Bildungsforschung - Innovartion

und Selbstreflexion. In: ZfPäd. 56Jg. 2010, S. 643).

そこまで言い切るか。ドイツの教育史研究は、研究手法の多様化、史料の拡張、国際的連携の進展によって、理念史中心主義からの脱却を果たしたという。この分野の呼称が「教育史 (Geschichte der Pädagogik)」から「歴史的教育研究 (Historische Bildungsforschung)」へと次第にシフトしていったことは、学問分野の自己認識が変化したことと無縁ではない。そこに私が感じるのは、学問的ギルドが維持しようとしてきた真理探究の「大地」の像から、情報化の荒波に浮かびつつ社会に自らの存在意義を示すことのできる拡張し続ける「人工島」のような像への転換である。教育史研究の像およびそれを表現しようとするメタファーは単数ではない。

日本の教育史研究とドイツの“Historische Bildungsforschung”のあいだには、おそらく共約不可能性が横たわる。辻本氏が強調した<翻訳>の重要性は、個々の研究に対してと同様に、それらが

依拠する学問ディシプリンそのものに対しても当てはまるだろう。「均質言語的」(酒井直樹)な世界観ではなく「異質言語的」な世界観にもとづいて学問ディシプリンを捉えようとするのが、「国際化」のあのよく知られた陥穽を避ける前提条件になるのではないだろうか。



代表理事退任にあたって

新谷 恭明

代表理事を一期3年を務めさせていただき、このたび退任することといたしました。辻本雅史前代表理事の下で事務局を預らせていただいた時から数えれば6年間の努めを終えさせていただくことになりました。

とは言え、この3年間なんとかやってこられたのは事務局長の八鍬友広さんと清水禎文補佐、囑託の八鍬靖子さんのご尽力によるものです。殊に八鍬靖子さんの高度な技術力、卓越した事務能力によって数多の課題を乗り越えることができました。心より感謝申し上げます。

1956年5月3日に教育史学会が誕生してからちょうど60年になります。人間で言えば還暦ですが、還暦の意は人生が一回りし、新たな人生が始まることを意味しています。教育史学会も米田新代表理事へのバトンタッチから新たな飛躍があることを祈念してやみません。

教育史学会はなんとか国際教育史学会 (ISCHE) の機関会員となり、国際交流委員会も具体的な活動



が見えるような組織として再編することができました。ここまで来られたのも、荒井明夫国際交流委員長には頑張っていただきましたが、とりわけ国際事情に明るい山崎洋子会員にはひとかたならぬお力添えをいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

聞くところによれば、今年の夏にシカゴで行われたISCHEの大会では教育史学会の数名の会員が参加し、国際的な貢献を果たしたようであり、とてもうれしく思っています。今後ますます国際的に評価の得られる研究が教育史学会から世界に向けて発信していくことを楽しみにしています。世界的には、日

本が参加するにあたり日本教育史の成果が期待されているともうかがっています。もとい国際的な貢献を果たしてきた西洋教育史や東洋教育史分野ばかりではなく、日本教育史分野の会員も国際舞台上で活躍されることを祈っています。

一方で、教育史学会の抱える課題は多々あります。米田新代表理事がメッセージの中でその一端について書かれています。本来なら私の任期中に手を打っておくべきこともあったと思いますが、大胆な改革をしていく勇気に乏しかったことは認めざるを得ません。新代表理事は誰もがご承知のように教育史学会のすみずみに至るまで通曉されている方であり、かつ実行力・実務能力をお持ちの方であります。是

非とも山積する課題を克服していく道筋を切り開き、基礎研究としての教育史学の確立をはかっていただきたいと願っています。

最後になりますが、いつも協力的な審議をいただいた理事の皆様方にも御礼いたしたく存じます。当然のことですが、学会運営は理事会が担うものです。その理事会が無用な対立や諍いを持つことなく、代表理事や事務局に不手際があった際にも前向きに支えてくれる議論をいただいたことはなによりありがたいことでありました。理事の方々への支えがあってやってこられたものと感謝しております。

みなさま、どうもありがとうございました。

代表理事就任のご挨拶

米田俊彦

冷静に考えれば考えるほど、大変な役割が回ってきてしまったと緊張しています。歴代の代表理事のような貫録も力量もありませんが、今回選出された理事会メンバーでは私が一番長く理事をやっていることになります。引き継ぐべきものは引き継ぎ、変えるべきものは時機を失わずに提案することが私の任務と考えています。

教育史学会は創立60周年という大きな節目を迎えました。ただ、今回のこの第60回大会が60周年記念日ではありません。第1回大会は1957年9月に早稲田大学で開催されましたが、その前の年の5月3日に東京学芸大学で創立大会が開催されました。この5月3日が教育史学会の誕生日であり、60歳の誕生日は今年の5月3日でしたので、もう過ぎています。1回目の還暦を過ぎて2周目がスタートした時点に立っています。60周年が過ぎたのに60周年記念誌はまだ完成していません。なんとか第62回大会までには刊行します。編集作業の開始が遅れた結果でして、申し訳なく思っております。

議事の中にも出てきましたように、国際交流委員会を正式の機関として位置づけることになりました。今年の4月から『日本の教育史学』がJ-STAGEに登



載され、これまでのCiNiとは違って、引用参考文献がデータ化されるようになりました。メーリングリストの運用も始まりました。時代の状況に応じた対応がそれなりに進んでいます。しかし、教育史研究が時代の流れのなかでその存在感をしっかりとアピールできているかといえば、やや不安なところがあります。

1つは会員数の減少が止まらないことです。さきほどの報告にありましたように、850人を割ってしまいました。一時950人を超えて1,000人に達するかと思われたこともありました。

もう1つは、日東西を通じての現象ですが、戦後史研究が広がっていません。日本に関して言えば、教育社会学、教育方法学、教育行政学などの分野では戦後教育史研究がさかんに行われています。時代の全体状況の中で教育を位置づけるという点では教育史研究も必要のはずです。このままでは、戦後改革までは教育史、その後は各分野で、という棲み分けが固定されてしまいます。私自身は、神奈川県立

総合教育センターから頼まれて神奈川県教育史の戦後編の編纂作業をしています。そこで得たノウハウなどを生かして、戦後を対象とする教育史研究の活性化策を考えていきたいと思います。

代表理事は理事会の代表ですので、常に理事の皆さんと相談しながら今後3年間、運営をしていきたいと思っています。ご協力のほど、よろしく願いいたします。

第61回大会(2017年10月7日～8日)のご案内

教育史学会第61回大会は、2017年10月7日(土)・8日(日)の予定で、岡山大学で開催することとなりました。岡山大学での開催は、1973年の第17回大会以来となりますから、44年ぶりのことです。もはや当時を知る在職者もおりませんが、教育史学会ホームページの大会記録によれば、この大会では「なぜ外国教育史を研究するか」という根源的で深淵なテーマのシンポジウムが実施されております。こうした企画に取り組みされた先達がたに恥ずかしくないような企画・運営・実施をめざしたいと思います。

岡山大学は、その設立の母体と経緯により、大きくは津島キャンパスと鹿田キャンパスに分かれています。今回の会場は、大学本部をはじめ多くの学部と教育研究施設が集まる津島キャンパスにあります。教育学部の本館と講義棟を予定しております。講義棟は現在耐震補強の改修工事が行われており、来年度にはリニューアルされ綺麗に整備された環境で、みなさまをお迎えできることと思います。

この教育学部も位置づく津島キャンパスには、文学部・法学部・経済学部・理学部・農学部・工学部・環境理工学部などがあります。教育学部の母体となったのは岡山師範学校・青年師範学校、とくに文学部と理学部の母体となったのが第六高等学校で

す。これらの学校を統合するため広大な敷地を残していた旧陸軍の軍用地を活用して出来上がったのが、現在の津島キャンパスとなりますので、これらの学校の遺跡・史跡は残念ながら、こちらには残されておりません。師範学校跡地には現在も附属学校園が存続し、また第六高等学校跡地は県立高等学校の敷地として利用されています。

会場となる津島キャンパスの教育学部には、JR岡山駅からバス利用となり、路線にもよりますが、アクセスは良いところです。シンポジウムやコロキウム等、大会企画につきましては、次回「会報」でお知らせできると思います。教育学部の会員をはじめ、院生・学部生、それに近隣大学の会員の方々にも応援をお願いして、企画・運営・実施にあたりたいと思います。

10月初旬、未だ残暑が厳しそうで、また台風シーズンでもあります。心配ですが、準備委員一同、心がけを良くして準備に勤めますので、多数の会員のみなさまのご支援、そしてご参加をお待ちしております。

第61回大会準備委員会
尾上 雅信(岡山大学)

* 図書

- ・河合務『フランスの出産奨励運動と教育―「フランス人口増加連合」と人口言説の形成―』日本評論社 2015/12/15
- ・小山常実『安倍談話と歴史・公民教科書』自由社 2016/4/25
- ・根川幸男・井上章一編著『越境と連動の日系移民教育史 複数文化体験の視座』ミネルヴァ書房 2016/6/20
- ・三好信浩『日本の産業教育―歴史からの展望』名古屋大学出版会 2016/6/30
- ・天野郁夫『新制大学の誕生―大衆高等教育への道(上・下)』名古屋大学出版会 2016/8/10
- ・三時眞貴子・岩下誠・江口布由子・河合隆平・北村陽子編『教育支援と排除の比較社会史―「生存」をめぐる家族・労働・福祉』昭和堂 2016/10/31
- ・越後純子『近代教育と「婦女鑑」の研究』吉川弘文館 2016/11/10
- ・『教育社会史史料研究』第10号 教育社会史史料研究会 2016/4/30
- ・『大学教育学会誌』第38巻第1号 大学教育学会 2016/5/30
- ・『教育学研究』第83巻第2号 日本教育学会 2016/6/30
- ・『研究論叢』第22号 神戸大学教育学会 2016/6/30
- ・『人間と社会の探求 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第81号 慶應義塾大学大学院社会学研究科 2016/6/30
- ・『研究室紀要』第42号 東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室 2016/7/29
- ・『大学教育学会ニュースレター』No. 103 一般社団法人 大学教育学会 2016/9/23
- ・『中研紀要 教科書フォーラム 別冊 中央教育研究所を作った人々①海後宗臣』中央教育研究所 2015/9
- ・『中研紀要 教科書フォーラム 別冊 中央教育研究所を作った人々②矢口新』中央教育研究所 2016/3
- ・『中研紀要 教科書フォーラム 別冊 中央教育研究所を作った人々③村上俊亮・飯島篤信』中央教育研究所 2016/9
- ・『筑波大学 教育学系論集』第41巻第1号 筑波大学人間系教育学域 2016/10

* 紀要・ニュースレターなど

- ・『玉川大学教育博物館紀要』第13号 玉川大学教育博物館 2016/3/31
- ・『日本仏教教育学研究』第24号 日本仏教教育学会 2016/3/31
- ・『安田女子大学大学院紀要』第21集 安田女子大学大学院 2016/3/31



事務局からのお知らせ

1. 事務局移転について

2016年12月1日より、事務局が上智大学に移転します。メールアドレスについては変更ありませんが、連絡先等は以下となりますのでご確認ください。

事務局長：湯川嘉津美	事務局嘱託：有馬 優
連絡先 〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1	
上智大学総合人間科学部 湯川嘉津美研究室	気付
TEL 03-3238-3586	

2. 国際交流委員会委員の選任について

第60回大会総会で新設された「国際交流委員会規程」に基づき、第60回大会年度第1回理事会において審議の結果、次の方々に国際交流委員をお願いすることとなりました。任期は3年となります。

荒井 明夫理事 一見真理子理事 遠藤 孝夫会員 佐野 通夫会員
新保 敦子理事 山崎 洋子会員 宮本健市郎理事

3. 会費納入のお願い

2016年9月より第60回大会年度がスタートしております。11月15日時点で会費を納入いただいていない会員には、払込用紙を同封いたしました。過年度会費に未納がある方には、未納分も合算して請求させていただいております。会費のすみやかな納入にご協力ください。

なお、年会費は「ゆうちょ銀行」（郵便局口座）からの自動引き落としにより納入できます。次年度より自動引き落としをご希望の方は事務局までご連絡ください。必要書類をお送りいたします。

4. 会員登録について

引っ越しでご住所が変わられた場合や、勤務先を変更された場合など、学会にお届けいただいている連絡先に変更が生じた場合は、忘れずに事務局までご一報ください。

また、現在次の方々が住所不明となっています。お心当たりの方がいらっしゃいましたら、事務局までご一報くださるようお願いいたします。なお、会員登録内容の変更は、ご本人からのお申し出によってのみ可能となります。

石原 義久 上田 浩史 遠藤華奈子 木村 松子 尹 秀安（敬称略）

謝辞：

これをもちまして、東北大学における事務局業務を終了させていただきます。この間、国際教育史学会への機関会員としての加入、教育史学会メールマガジンの創設、ホームページのリニューアルなどを進めることができました。ご協力をいただきましたすべての皆様に感謝申し上げます。

2016年11月
学会事務局 八鍬 友広

教育史学会 会報 No. 120 2016年11月25日

編集・発行 教育史学会事務局 八鍬友広
〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1
東北大学大学院教育学研究科
八鍬友広研究室 気付
電話 022 (795) 6117
電子メール mail@kyouikushigakkai.jp
郵便振替口座 00140-0-552760 教育史学会事務局

印刷 城島印刷株式会社